

## 「空想」の理論に関する考察

村上碧海\*・松下姫歌\*

A Consideration for Theories of “Fantasy”

Ami Murakami\* & Himeka Matsushita\*

Fantasy is an act that is done by almost everybody. However, “a fantasy” is hard to define. This is because fantasy is a private act, and even among researchers, there is no consensus of opinion about its meaning. Therefore, various theories about the concept of fantasy were organized, and previous studies were reviewed from the perspective of psychoanalysis and analytical psychology. Then, these studies were analyzed from the perspective of similarities and differences between these two psychological theories in relation to the concept of fantasy.

Key words; fantasy, psychoanalysis, analytical psychology

### 問題と目的

空想とは、現前の現実世界とは別の虚構世界を表象する精神活動、あるいはその産物(木下, 1999)を指している。表象とは直観的に心に思い浮かべられるイメージである。Person(1995)は、空想は想像の一種であるとしている。想像は象徴を創出・操作する能力に基づいており、直接的な感覚認識では捉えきれない可能性について考える心的能力であるとしている。つまり、空想とは外的現実の世界とは異なる世界を想像し、心にそのイメージを思い描く行為であるといえる。藤岡(1983)は、想像あるいは空想によって心に思い描かれたイメージには「模写性」と「独自性」という二面性が存在すると述べている。模写性とは情報や身体内部からの感覚情報をまとめた形である知覚によって支えられる側面であり、独自性とは想像する主体にとっての意味づけがなされる側面である。そのようなイメージは、外界にある実物の特定性に忠実であろうとするよりも、内界の特殊の意図と意味づけに忠実であろうとする面も持つとしている。このことを踏まえると、空想はイメージを生み出す想像行為であるが、生み出されるイメージは空想する主体の内的世界の様相に大きく影響されると考えられる。

このような、空想することはほとんど全ての人が行っている行為である。人によってその性質や量は様々に異なっているものの、空想は人々が昔から行って、小さい時から自然に身につけて

---

\* 広島大学教育学研究科(Graduate School of Education, Hiroshima University)

いる能力の一つである(松井・小玉, 2001)。空想は人間の経験に驚くほど大きな影響を与えている(Person, 1995)。一般にも、例えば、能力の向上や精神安定の方法として、空想の力・イメージする力を用いるトレーニングは広く知られているし、また、心理臨床においても、空想やイメージを用いた心理療法がさまざまに発展している。

しかし、これらのさまざまな方法は、それぞれの立場において、独自に空想のメカニズムや機能を捉えている。空想するという行動は完全に私的なものであるため、誰もが認めうるような形でその定義を一般的に公式化することは難しいといった、「空想」の定義に関わる困難が指摘されている(Singer, 1975)。空想を、目覚めているときの内的な意識過程の一部と捉えることはできるにしても、「空想」だと認識しているものに差異があり、「その意識過程のどこにどのような観点から空想を位置づけるのか」という点について研究者間で一致が得られていないという問題が指摘されている(松井・小玉, 2003)。

空想が、心理学および精神医学の分野において、最初に研究対象とされたのは、主として精神分析による臨床的研究においてである(松井, 2001)。加えて、空想とイメージの機能を理論の中核においているものとして分析心理学があげられる。本稿では、空想という心的行為がどのようにして生じるのか、空想という心的行為にはどのような機能が含まれるのかという点についての知見を整理していく端緒として、Freud に始まる精神分析と Jung の分析心理学における空想についてとりあげ、空想のメカニズムと機能について考えたい。

## 精神分析における空想

### 1) 精神分析における心の構造とはたらき

精神分析は、Freud, S.が創始した心理療法と心についての理論体系であり、心的なものを意識的なものと無意識的なものに分けることは大前提 (Freud, 1923)とされる。つまり、心の生活の基盤に無意識のはたらきを仮定する点に特徴がある。ただし、精神分析は、クライアントの神経症の治療を通じて得られた新たな知見によって発展したため、その心の理論と治療論も時期によって変化している。

Freud は、神経症の治療過程において、症状発生にまつわる回想を連想的に辿っていく中で、治療に対する「抵抗」現象が生じることに着目し、抵抗は、意識すると不安になるような心的内容を意識せずにいられるようにする「抑圧」のメカニズムによるものとする抵抗=抑圧論を提示した。無意識は意識から拒絶され抑圧によって隔離されたものとして位置づけられる。抑圧されたものの特徴は、それが強烈な力を振るいつつも意識までは到達できない(Freud, 1907)ことにある。それがその時点での心のバランスの取り方であり、適応の仕方である。しかし、抑圧された無意識が強い力を振るうのは、それがゆくゆくは意識との結びつきを必要とする正当性があるからである。さらに、Freud は、治療の進展につれて、性的な体験、ひいては、幼児期の体験が語られることから、抑圧される内容は性的かつ本能的な外傷体験であるとする、外傷論を提唱した。しかし、その後、外傷体験が外的現実として生じているかどうかではなく、心的現実として生じていることこそが神

経症症状を生んでいることが明らかになり、心の生み出す空想を重視する心的現実論・欲動論を發展させた。

こうした精神分析の發展の中で、Freud は、心の機能や構造について、次のように考えている。1910年代の局所論では、心の領域と体系を、意識・前意識・無意識と捉え、この3つの体系が相互に関連しあいながら機能していると考えている。意識は、比較的容易に把握可能な心的過程、前意識は意識されてはいないが注意を向けることで比較的意識することの可能な心的過程、無意識は意識されることが難しい心的過程である。無意識体系は、本能の充足を目的とする一次過程、意識・前意識体系は、外界への適応を目的とする二次過程と位置づけている。無意識へと抑圧されるものは、それ自体はいつも本能的欲求を満足させる快樂を伴うが、他の要求や意図とは一致しない(Freud, 1915)。しかし、本能的欲求は生得的な生の欲求とつながるものである。一方で、外的適応は社会的共存の欲求とつながるものである。Freud は神経症の起源を、人間が意識の上では社会的・理性的存在として生きようになり、生き物としての本能すら、自らの社会的存在としての生をおびやかすものとして見なすようになったという、一次過程と二次過程の葛藤、すなわち無意識的な本能と意識的な理性の間の葛藤として捉えていた。

1920年代には、心はイド・自我・超自我から成る心的装置として捉える構造論が提唱されるようになる。このうち、イドは本能的欲動の源泉であり、衝動の即時的満足を求める快樂原則に支配されている。個人の言動や思考、感情に多大な影響を与えながらも本人には自覚されていない、すなわち無意識的であるという特徴を持つ。自我は、外的現実への適応をはかる現実原則に基づいて機能し、イドの欲求充足を、社会に許容されるような外的現実に適応しうる形で達成できるようコントロールする。そのため現実原則は、現実に応じるために外界を吟味しながら欲求を最大限に満足させるための適切な計画を立てる機能を持つ。超自我は、幼児期の両親との同一視や両親の価値観の取り入れなどを通して形成される、いわゆる良心、倫理規範や理想といった、全人的で総合的な方向付けを担う機能と言える。超自我は、快樂原則に従うイドの本能的欲求の最終的なストッパーとしての側面がある。すなわち、超自我は、自我がイドの本能充足欲求を処理しきれなくなり、外界に表出されようとする「～したい」という欲求に対して、「～でなければならない」という理想のもと、その欲求を検閲してそのままの形で外界に表出するのを避けるよう機能する。一方、自我は、社会規範を内的に取り込んで形成された超自我理想をも、いまの現実と照らしつつ、イドの本能的充足との調整をはかる役割も担うことになる。したがって、自我は、イドの本能充足欲求と超自我理想との対立を現実原則に従って調整することで、本能を、自らの全人的な規範と社会に受け入れられる形で見つけ、現していく機能であるといえる。ただし、自我の調整が間に合わず、超自我理想とイドの本能充足欲求が対立して方向付けられない状態を葛藤という。

Freud は、もともとは、神経症は本能と理性の葛藤すなわち、社会規範的理性が本能を危険視して抑圧するために生じると考え、局所論時代は、それを一次過程と二次過程の対立として捉えていた。構造論を提唱した当初も、自我と意識をほぼ同一視していたが、自我の機能は、快樂原則による本能的イドと内に取り込んだ社会規範としての超自我との対立を、現実原則に従っていかに調整するかという点にあることを提唱し、加えて、そのような自我の調整機能は、かならずしも意識

的領域でなされるとは限らず、無意識的になされることも多く、自我機能には意識面と無意識面があることを指摘するに至っている。

このように、Freud の理論においては、神経症は、イドの本能的欲求が意識にのぼると、社会的存在としての自分のまとまりがゆらぎ、受け入れられないように感じて不安になるため、イドの本能的欲求を無意識に抑圧するが、それでは本能的欲求がまるまる犠牲になってしまうために、生きる存在としての根底がゆらぐことになる、といった葛藤として理解され、精神分析における治療方針は、自我がその葛藤の調整をよりよくしうよう、抑圧されたイドの本能的欲求を、自我にとって見やすくしていくことになると言える。

## 2) 精神分析における空想のメカニズムと機能

空想が、心理学および精神医学の分野において、最初に研究対象とされたのは、主として精神分析による臨床的研究においてであった(松井, 2001)。

Freud(1908)は幸福な人は決して空想しない、空想するのは満たされない人にかぎると述べている。満たされない欲望こそが空想の原動力であり、個々の空想はいずれも欲望成就であり、満足をもたらしてくれない現実を修正せんとするものである(Freud, 1908)。

空想が成立する過程について、Freud(1908)は、当人の大きな欲望を呼び覚ますことになった、現在における何らかのきっかけから始まるとし、その欲望の成就した姿として未来のある状況を心の中に空想として創り出すが、その際に、その欲望が成就していた過去の想い出へと辿り着く。つまり、創り出された未来の状況としての空想には、現在のきっかけと過去の想い出の二つの出自の痕跡が染みついている(Freud, 1908)。Freud は、いまの自分にまつわる欲求不満を心的に満たそうとする空想機能を、催眠や自由連想による治療の中で生じる現象や、日常生活におけるいい間違いや夢などの現象の中に見いだした。このような空想の機能について、Rapaport(1960)は、幼児の飢餓衝動の喚起と充足の観点から、空想についての基本モデルを衝動減弱説として提唱している。空腹の幼児は空腹が解消されない場合、乳房や哺乳瓶の幻覚を持ち、幻覚の形ではありながらそのイメージによって、実際に母親がやってきてミルクを与えてくれるまでの間の、泣き叫んでしまうような充足追求行動を抑制でき、一時的な充足価値を得ることができると述べている。つまり想像によって、最初にかき立てられた衝動が部分的に放出される体験をし、一時的な衝動の減少化を起こす(Singer, 1975)。このモデルでは、成人の空想は安全弁のような性質をもつこととなる。成人にとっての衝動の部分的解放の手段は子どもじみた願望充足的な思考を持ち越すことであり、抑えられた本能やあるいは社会的に受け入れがたい性的・攻撃的傾向が外に表れないようにするための代理満足として機能している(Singer, 1975)。つまり、精神分析的観点からみた空想は、象徴化や置き換え、あるいは社会的に認められる形によって、これら本能的衝動がそのまま表現されるのを回避する試みを表すものである。これは、私たちの空想の大半は限られた衝動、とりわけ生体的な官能的欲求または性欲、あるいは内なる周期的な攻撃的衝動の充足を反映しているという意味をもっている(Singer, 1975)。Rapaport(1960)はこれを、空想の代償満足的機能であると述べている。

Freud は、このような、本来ならばそのままの形では社会にも自らの倫理観の中にも受け入れが

たい本能的欲求を、日常生活を営みながら充足できるような形として機能しうる「空想」をも抑圧してしまうことが、神経症症状、とくにヒステリー症状を生むと考えていたわけである。Freudは、ヒステリー症状患者、すなわち、現在のDSM-IV(1994)で言う身体表現性障害または解離性障害にあたる、転換症状と解離症状を主とする精神疾患群の患者の病因について、こうした空想の役割に注目していた。転換症状とは、身体は健康であるのに手足が動かなくなったり、声が出なくなったりする身体症状の表出である。解離症状とは、本来統一されている意識や感覚、記憶の統一性が一時的に失われることであり、現実にはもうろう状態や二重人格などを呈する。このようなヒステリー症状について、Freud(1908)は、欲望成就に仕えている何らかの無意識的空想が、現実的な姿で現れたものであると述べている。無意識的空想とは、最初から無意識のうちに形成されたものであるか、あるいはかつては意識的な空想であったが、その後、意図的に忘却されるか、抑圧を通して無意識的になったものかのいずれかであるとしている。

Freudは、ヒステリー症状の源として、かつては意識的空想であったが、抑圧すなわち意識からの拒絶と隔離が行われて無意識的空想となったものを挙げている。例えば、Freudは、『ヒステリー研究』におけるエリザーベットの症例で、姉の死後ひどくなった、脚が痛くて立って歩けないという症状が、治療を通じて、性愛感情の抑圧から生じていることを示している。エリザーベトは治療抵抗の強い患者であったが、その抵抗を段階的に取り除いていくことによって、その症状形成の中核をなす空想や連想の層が明らかとなっていった。彼女は、もともと、自分自身の資質や主張を犠牲にする結婚に疑問を抱いていたが、価値観の合う青年との間でなら理想の結婚が成就するという期待をもちはじめた。しかしその青年とのデートから帰ると父親の病が悪化しており、性愛感情は罪悪なこととして抑圧され、意識においては“なかったこと”とされた。しかし、青年への愛情や結婚願望の強さの分、それを罪なこととして否定することが、強い痛みとなり、父の包帯交換の際に父の足をのせていた腿の部位の疼痛に置き換えられた。さらに、父の死後、幼い頃のような家庭を一人の力で再建したいという願望をもっていったが、その願望が次々と打ち砕かれる中で、孤独な女性としての弱さと男性の愛への憧れが生じはじめた。しかし、それが強ければ強いほど抑圧され、一人で立っていることの辛さ、頼りなさ、一歩も歩けないような疲れや弱さといった思いがどれだけ強いものであるかを、身体的に体験し表現していた、ということがさまざまな形で明らかになった。

エリザーベットの症状は、彼女の精神生活の歴史の中で、段階的・複合的に形成されたものであるが、姉の死後、脚の疼痛や失足失歩がいよいよ治療が必要となった時点での症状形成において、もっとも中核的な役割を演じた空想が、「姉の夫がフリーになった。姉の夫と結婚してもいいのだ」というものであり、もっとも強く抑圧されていたものであった。そのような感情があったことを、彼女は強い痛みと叫びとともに認めた。彼女は、自らの弱さや男性との愛への憧れを自覚する中で、自らの本質的なものが溶解しはじめたと述べている。エリザーベトはその後、ある男性と結婚するに至っている。つまり、本能的欲求から生じた空想を受け入れ、その空想に含まれている本能的な欲求を受け入れることによって、自らの本質をとらえ、自らの人生を生きることにつながり、おそらくは、彼女が求めていた幼い頃のような家庭を作り出すことにもつながっているのである。

このように、Freudが精神分析による治療を通して、さまざまな心の現象を明らかにする中で示

していることは、人間の心の生活や行動の背後には、意識されていない空想が存在し、大きな影響を与えているということである。そして、空想はそもそも、満たされない本能的欲求を心の次元で満たそうとする機能をもっているにもかかわらず、空想が、ある程度機能している場合でも、“子どもじみた”ものとか“現実的でない”ものという風に価値下げられる。さらには、そのような本能的欲求があることすら超自我的理想と与した意識からは認められない場合に、抑圧によって意識的な心の生活から閉め出され、ヒステリー症状に置き換えられ、保持されることとなる。つまり、本能的欲求を心の次元で捉えた空想が生じるからこそ抑圧が生じ、抑圧が生じるからこそ、空想内容は心の奥深くに手つかずのまま保持され、しかし、体现されることを求めて、身体的な痛みと形に象徴的に置き換えられて現れる。精神分析による治療は、本能的に必要とするものを空想する力を認め、心の生活における隔離から取り戻し、空想の力を創造の力に変えていくことと言える。

一方、Freud(1907)は、空想が主導権を握る状態、つまり空想が信用され、行動に対して影響を及ぼすに至ることに特徴づけられるものを「妄想」と呼んだ。Freud(1908)は、この状態を空想が過度に肥大し優勢になりすぎた状態とし、神経症や精神病に罹患する条件になると指摘している。精神分析は、イドあるところに自我をあらしめることが根本原則とされる。イドの本能的欲求から生み出される空想に、自我がいかに向き合うことができるかが、自らの課題を心の領域で受けとめて解きほぐし、自らの本質を適切な形で見いだすことにつながると考えられる。

## 分析心理学における空想

### 1) 分析心理学における心の構造とはたらき

Jungの分析心理学は、無意識を仮定するという点で、精神分析と共通しているが、意識と無意識や、自我といった用語で指し示す内容は、少しずつ異なっている。

Jungは、心を意識と無意識からなるものとし、無意識は、意識されていない心の領域やはたらきであるとする。そして、意識の中心を自我、無意識も含めた心全体とその中心を自己と呼び、自我と無意識的な自己との関係の持ち方を重要視する。Freudも初期においては、自我を意識の中心と考えていたが、後に、意識と無意識の調整役として自我を位置づけるようになり、自我は意識と無意識の両方と関わるものとした。Jungにおいては、そのような調整の役割をひとつの機能として独立させるのではなく、調整をあくまで自我と無意識的自己との対話として捉えた点が異なると言える。

無意識については、精神分析においては、意識すると不安になるために抑圧されたイドの本能的欲求からなるとされたが、この点について、Jung(1928)は、無意識は、抑圧された要素のほかに、意識と無意識の境目である識閥下の感覚知覚を含めて、偶然に識閥下となったさまざまな心的なものが存在するとしている。さらに、意識には個人的無意識の層と普遍的集合的な無意識の層があるとしている。

個人的無意識に関しては、意識することに現時点では抵抗があるため抑圧されたものの他、個人の生活において意識されていないが無意識に獲得されているものや、意識しようと思えば意識でき

る前意識的な心理的要素なども含まれる。それらの素材を個人的内容として認識するのは、それらの作用や部分的な現われや由来が、私たちの個人的な過去についての回想の中に指摘できるからである。Jung は、個人的無意識の内容が意識に取り入れられるとき、人格の「拡大」が生じるとし、見過ごしていた状況の意味や引き出せなかった結論、あるいは認め難かった情動といった個人的無意識の素材が意識に加わるとき、自己認識の深化がもたらされるとする。Jung は、精神分析の捉えている範疇はこの個人的無意識に関するものと考えている。

一方で、Jung においては、上に述べた自我の拡大路線は、人生前半のあり方と捉えられている。そのプロセスで、自我にとって自分と言えるものが獲得されていく一方で、自分のものとしては獲得されず忌避されるものが生まれる。注意できる範囲や記憶できる範囲が限られているように、意識の活動は選択的である。自分のものとして選択された方向から排除される諸内容は、無意識へ送り込まれる。Jung は、この意識的活動から排除された無意識的内容は、意識的活動に対する一種の抑制を示すとし、意識的活動に対する無意識的な調整作用を指摘している。すなわち、自我による意識的な選択が一面的に偏ると、その意識の方向付けの清算、補充という形で反動現象が起きるとし、これを補償と呼んでいる。つまり、自我のいわゆる人格の拡大と価値観の形成は、同時に、心の態度の偏りを形成することでもある。価値観が定まれば定まるほど、自分のものとしては認め難いものを忌避する度合いも強くなるのである。そのような自我の態度の偏りが強まることで、自我の価値観に縛られ、自我はももとの自我の源である無意識から新たな価値を受け取りにくくなる。つまり、無意識にはキャッチされたり見いだされたりしている価値を、自我が形成した価値と統合しにくいものは無視するようになる。そのような自我が無意識的自己との交流を断つような事態は、心の分裂状態であり危機であるとする。このような事態に対して、意識的自己は心全体の調整をはかって、自我を補償するイメージを産み出し、症状や夢や空想といった形で自我に知らせようとするわけである。そのことによって、自我と無意識的自己の関係を新たに取り戻すことが、全体性の回復と呼ばれる。

このような、自我が自分の人格を形成するプロセスで獲得してきたものの裏に、自らが価値下げしてきたものがあることを視野に入れ、無価値の価値を知り、いわば自分と自分でないものとの関係を見いだしていくことが、人生後半の課題であるとしている。このような課題は、個人的な葛藤でありつつも、個人的な葛藤を超えた、世界とのつながりを見いだし、自らを自分たらしめる個人を超えた力とのつながりを見いだすといった、普遍的テーマを含むものと言える。それは、自分を超えた視点で自分を捉えることで、よりユニークな自分と言えるものをつかんでいく作業であり、そのような意味で自分が自分になっていくプロセスを個性化と呼んでいる。

こうした、個人が個人を超えた視点から自らを捉えることで、より自分自身を見いだしていくという個性化に関わるものとして、Jung は集合的無意識という概念を提唱している。Jung は、患者の夢や空想に含まれるイメージから、無意識のなかには個人的なものばかりでなく、太古的な神像や原始の神のイメージといった超個人的なもの形象が備わっていることを指摘している。そのような神話的性格を備えた普遍的・人類史的象徴性について、人類が普遍的に共有している集合的無意識を仮定している。Jung(1928)は、意識および個人的無意識は、心的機能の「上層部分」、つまり個

体発生的に獲得され発達させられた部分であると述べている。さらに、超個人的あるいは非個人的性質をもつ集合的心は心的機能の「下層部分」であり、各人の人格の基礎として下位に属しているものであると論じている。Jung は、そのような集合的無意識に、個人を超えた太古的で普遍的なはたらきがあり、それが現代人の心に生き生きとした作用を展開しうることを示している。集合的無意識は、自らの個性を個の枠組みのみから捉えることを超えて、さらに大きな視点から自らを相対化することで、自らの本質を深く見いだすための、大きく深い尽きせぬ可能性を含む自己の視野とも言えよう。

## 2) 分析心理学における空想のメカニズムと機能

Jung の分析心理学においては、空想はイメージとほぼ同義である。空想の生じるメカニズムについては、上に述べたように、意識的自我の態度が一面的に偏り、心全体との関係を見失うような事態に陥ると、無意識的自己が、自我の態度を補償するイメージを産み出すという自己調整機能がはたらき、症状や夢や空想といった形で自我に知らせようとすると考えられている。空想に含まれるものが、現時点で意識に受け入れられないものである、という点については、Freud の考えと共通している。また、空想やイメージが人間の行動や心の生活に、無意識のうちに大きな影響を及ぼしているという点も共通している。しかし、Freud が本能的欲求にもとづく空想を抑圧することでヒステリー症状に置き換えられると考え、夢が本能的欲求を意識に受け入れられやすい形に変形されたものという風に、心の産み出す空想が、意識には見えないようにするか歪められるかして隠蔽されるものと捉えたのに対し、Jung は空想が無意識からの自我に対するメッセージであり、心の状態についてこれ以上なくよく捉えられ表現されたものと考えた、という点で対照的である。

Jung は、空想やイメージは、このようにして、意識的自我と無意識的自己の間に生まれるものと考えた。このような空想やイメージの機能を、Jung は象徴という概念で説明している。Jung (1960) は、象徴と記号を次のように区別している。ある表現を「ある既知のもの類似物あるいは略称とする捉え方」は「記号」的把握である。つまり、ある表現がそれ自体で既に説明しつくされている場合は、その表現は〇〇のことを指す、というように、記号として機能し、それ以上の意味を持たないということである。これに対し、ある表現を「比較的未知のものと考えられるかぎり最善の、したがってまずはそれ以上明瞭あるいは性格的には全く表すことのできない定義だと説明する捉え方」は「象徴」的把握である。つまり、尽きせぬ本質についての意義深さをさまざまな形で含み、現時点ではこれ以上なくよく表された、しかもその本質の未知性に対してもさらに拓かれる可能性を含んだ表現が、象徴であると言える。Jung は、その表現が生きた象徴と呼ばれうるのは、観察するものにとっても予感されてはいるがまだ知られていないものの最善、最高の表現である場合に限り、その象徴から予感されていた意味が汲み尽くされてしまうと、象徴は死んでしまう、としている。加えて、そのような象徴性は、それを見る意識的自我の態度によるとしている。つまり、象徴が本質についての尽きせぬ意味を持ち続けるということは、自我がその象徴に対してその本質的な意味を見だし続けるということである。このことは、自我が無意識的自己が産み出すメッセージに向き合い続けるということであり、自我と無意識の関係を持ち続けるということである。



また、Jung(1960)は、この自我が無意識と関係をもつたらきや態度を、空想(すること)あるいはイマジネーション(イメージすること)と呼んでいる。Jungは空想を、受動的な空想と能動的な空想に区別している。このうち、能動的な空想は、無意識的内容に対する自我の積極的関与から生じる。この場合、積極的関与とは、自我の態度の一面性に対し無意識が産み出すイメージに対するものだけでなく、直観に基づいて、まだ特に際立って示されていないような、無意識的関連から生じる暗示や断片を拾い上げ、それらを連想によって明確なものに仕立て上げようとする意識の態度の傾向をも指し、Jungはこれを最高の人間の精神活動であると評している。

こうした空想の成立について、Freudは過去の記憶に還元されるという点を強調したきらいがあるが、Jungは特に目的論的立場からその心理を論じている。上に述べてきたように、無意識的自己は常に、意識的自我を超えて心全体としての自己の状態を捉えており、自我にとってのスーパーヴィジョンとしてのイメージを産み出す。自我はそのイメージに向きあい、イメージを見だしつづける空想活動を通じて、自らに必要なものを開拓しつつける。このことについて、Jungは無意識の産み出すイメージを対象化し、自我を空想に積極的に参加させ、意識的に干渉することによってそのような「目的」への方向が生ずると述べている。目的とのかかわりにおいて解釈する観点から見た空想は、無意識的内容も含めたあらゆる素材の助けによって、特定の目標あるいはある種の心理的發展が将来たどる道筋を明らかにしようと努める象徴である(Jung, 1960)。

このような空想の肯定的役割が提唱される一方で、空想が主体の脅威となる場合についても論じている。Jung(1928)は、人類普遍の素材としての集合的心をあたかも個体発生的に獲得したものであるかのように意識に加えてしまうとすれば、不当に人格の範囲を拡げたことになるかと述べている。超個人的な心的内容が空想として意識に働きかけられ、しかしそれに対して身を守ることができず、にのみこまれた状態を、Jungは個人としての限界を超えた人格の拡張であるとし、自我肥大と呼んでいる。Jung(1960)はこのような場合を受動的な空想と呼び、意識へ侵入してくる空想に対して完全な受動的態度をとることとしている。これは、せっかくの無意識的自己のスーパーヴィジョンであるイメージに向き合わないために、自分を捉えどころか、無意識的イメージに飲み込まれて受動的に動かされてしまうような空想態度と言える。

### 精神分析における空想と分析心理学における空想の共通点と相違点

上に述べてきたように、空想に含まれるものが、現時点で意識に受け入れられないものであり、無意識的色彩が強いという点と、空想やイメージが人間の行動や心の生活に無意識のうちに大きな影響を及ぼしているという点については、FreudもJungも共通している。ただし、Freudが空想を意識に対してその本質を隠蔽される側面を強調したのに対し、Jungは、空想は無意識が意識に対してその本質を現時点でもっともよく顕現させたものと捉えている点で異なる。

また、Freudが空想を個人の心的生活における現在と過去の因果的文脈で捉えようとするきらいがある一方、Jungは空想を未来の可能性に向けての目的的文脈で捉えようとするという違いがある。しかし、Freudにおける空想も、もともとは現在の時点における自らの心的状態に対する本能的欲

求から生み出されるものであり、その際に過去の体験の記憶と照合されるという面を含んでおり、本質的には未来への目的性を孕んだものと捉えられていると考えられる。

そして、いずれも、空想が含んでいるのは、本能的欲求であったり、自己の本質であったりと、空想する主体の根源的な面に関わるイメージを生み出し、そのイメージに自我が向き合い続けることによって始めて、主体が自らの根源とのつながりを持つという面で共通していると言える。これに関し、両者とも、自我が無意識的空想に圧倒され巻き込まれてしまうことは心の危機に陥ることであり、空想に対して自我を関与させて向き合っていくことが肝要であるとしている点で共通していると言える。

### 空想の認知技能説と感情調節説

以上、空想を心の機能の中心に据えた代表的理論として、精神分析と分析心理学をとりあげ、両者における空想について論じた。この他、これらの理論と関連をもちながらも、空想についてやや異なる考え方を提唱し、日常生活における空想の機能について検討しようとする立場について、いくつか触れておきたい。

Singer(1975)は人間であることは同時に白日夢をみる存在であると述べている。その裏づけとして、Singer は、アメリカの比較的正常で教養の高い中流階級の男女多数に対し、約二十年間に渡って、白日夢すなわち意識に生じる空想に関する調査研究を行い、白日夢は誰もが持つものであることを明らかにした。加えて、多くの場合、白日夢は日常生活のかなり実際的で直接的な関心事を未来へ投影することによって成り立っているとし、空想の認知技能説を提唱している。この説は、空想は自分の身の回りの世界とは別の次元の可能性を探索・模索しようとする創造的な能力であるとするものである(Singer, 1975)。さらに、空想は、現在の状況、感情、組織的経験を反映し、自己に関連する情報、学習の促進を提供し、意思決定を刺激するとする(Klinger, 1990)。加えて、Singer(1975)は、実験場面で侮辱されたり怒りを掻き立てられたりした被験者は、空想したり TAT の絵に対する文章を書いたりすることだけでも実験者に対する攻撃的傾向を減少させた、というワシントン大学の研究グループが行った実験を紹介した。Singer は、この結果は一見したところ攻撃性という本能的衝動を空想によって低減させたように見えるが、実際に被験者が空想した内容は、自分自身に怒りを向けたり空想する機会があったため、自己の状況を再検討して、侮辱した実験者の言い分にも一理あると思うに至ったというものであり、このように自らを対象化して再検討する中で産み出される空想は、代理満足というよりも、欲求不満を心の中で扱い、攻撃を直接向けるのではない別の解決策を探る技能であるとしている。

この認知技能説を踏まえて、近藤(1986)は、人はある状況をどのように認知・対応するかを内的にシミュレーションすることによって自らの心の世界の構造を作り上げていくと論じ、その意味で空想は一種の内的シミュレーションであると考えた。また、Person(1995)は、空想すること(想像)がなければ現在における何らかの不満や剥奪に代わる状況を心に描くことも、将来の行動方針を計画することも、過去を創造的に考え直して現在と未来に関連付けることもできないだろうと説明す

る。加えて、Person は、幸福な未来を空想すれば抑うつや無力感に圧倒されず、受け入れがたい痛みも耐えられる、そして例え望みがないという状況でも、空想することで未来に対する希望が持てるようになるであろうと述べており、空想のもつ、人の感情を調節し、悲しみや痛みを和らげる機能に注目している。松井・小玉(2007)は、学生を対象に空想に関する自由記述調査を行い、空想の役割についてKJ法で分類した結果、「気分転換」「心を癒す」「ストレス・欲求不満の解消」「イメージトレーニング」「考えを変化させる」などの回答が集まった。松井・小玉(2007)はこれらの回答は Singer の認知技能説や Person の感情調節役割を支持していると述べている。

これらは、ひとまずは、空想を通じて現在の心的状態に関わることで未来を志向する方向性を持ち、主として未来の満足可能性を与えてくれるガイドとしての空想(Person, 1995)を考えていると言えよう。ただし、いずれの場合も、自らの心の状態を無視するような自我の関わり方となってしまうと、自己と自己の可能性に対して拓かれるどころか、刹那的で偏狭な視野に自らを閉じ込めてしまうことになり、結局は無意識による補償的イメージに向き合うことになると考えられる。

したがって、認知技能説においては、空想を通じての気づきがどのように生じるのか、感情調節説については、空想を通じての感情調節がどのように生じるのか、いずれの場合も、そのプロセスと心的メカニズムをさらに詳細に検討する必要があると考えられる。加えて、それらを、精神分析や分析心理学における空想のメカニズムや機能と照らして検討することで、心におけるいわゆる正常や異常の連続性と非連続性に関して、空想という機能を通じてよりよく細やかに理解することにつながると考えられる。そのことは、心が困難に陥った場合の空想機能を用いた心理療法に寄与するのはもちろん、日常の心的生活をよりよく営むヒントにもつながると考えられる。

## 引用文献

- 木下孝司 (1999). “空想 fantasy” 中島義明・安藤清志・子安増生・坂野雄二・繁樹算男・立花政夫・箱田裕司(編) (1999). 心理学辞典 東京: 有斐閣.
- Jung, C.G. (1928). *Die Beziehungen zwischen dem Ich und dem Unbewußten*. Darmstadt: Reichl.  
(松代洋一・渡辺 学(訳) (1984). 自我と無意識 東京: 東京ベル印刷)
- Jung, C.G. (1960). *Psychologische Typen*. 9th ed. Zürich: Rascher.  
(高橋義孝・森川俊夫・佐藤正樹(訳) (1987). 心理学的類型Ⅱ 京都: 文功社)
- Freud, S. (1907). *Der Wahn und die Traume in W. Jensens “Gradiva”*. In Sigm. Freud *Gesammelte Werke chronologisch geordnet VII*. Frankfurt: S. Fischer.  
(種村季弘(訳) (1996). *グラディーヴァ/妄想と夢* 東京: 作品社)
- Freud, S. (1908). *Der Dichter und das Phantasieren*.  
(道旗泰三・西脇 宏・福田 覚(訳) (2007). フロイト全集 9 東京: 岩波書店 pp.227-240.)
- Freud, S. (1908). *Hysterische Phantasien und ihre Beziehung zur Bisexualität*.  
(道旗泰三・西脇 宏・福田 覚(訳) (2007). フロイト全集 9 東京: 岩波書店 pp.241-250.)
- Freud, S. (1912). *Einige Bemerkungen über den Begriffe des Unbewusten in der Psychoanalyse*.  
(井村恒郎・小此木啓吾・懸田克謙・高橋義孝・土居健郎(訳) (1970). フロイト著作集 6 京都: 人

- 文書院 pp.42-48.)
- Freud, S. (1915) *Verdrangung*.  
(井村恒郎・小此木啓吾・懸田克彥・高橋義孝・土居健郎(訳)(1970). フロイト著作集 6 京都: 人文書院 pp.78-86.)
- Freud, S. (1923). *Das Ich und das Es*.  
(井村恒郎・小此木啓吾・懸田克彥・高橋義孝・土居健郎(訳)(1970). フロイト著作集 6 京都: 人文書院 pp.263-299.)
- 藤岡喜愛 (1983). イメージ—その全体像を考える 東京: 日本放送出版協会.
- Klinger, E. 1990 *Daydreaming: Using waking fantasy and Imagery for self-knowledge and creativity*. Los Angeles: Jeremy P. Tarcher.
- 近藤敏行 (1986). 幻想と空想の現象心理 近藤敏行(編) (1986). 幻想と空想の心理学 京都: ナカニシヤ出版 pp.7-100.
- 松井めぐみ・小玉正博 (2001). 空想は不健康か? (1) —空想研究の概観—筑波大学臨床心理学論集, 16, 49-55.
- 松井めぐみ・小玉正博 (2003). 空想概念の多次元尺度構成法を用いた定義化 筑波大学心理学研究, 26, 229-233.
- 松井めぐみ・小玉正博 (2007). 大学生における空想傾向と精神的健康との関係—ストレス対処型を媒介とした検討— カウンセリング研究, 40, 236-243.
- Person, E.S. (1995). *By force of fantasy: How we make our lives*. New York: Basic Books.  
(浅尾泰訳・岡 昌之(訳)(1997). 人はなぜ空想するのか 東京: 翔泳社)
- Rapaport, D. (1960). *The structure of psychoanalytic theory: A systematizing attempt*. Psychological Issues, 2(2). New York: International Universities Press.
- Singer, J.L. (1975). *The inner world of daydreaming*. New York: Harper and Row.  
(シンガー J.L. 小山睦央・秋山信道(訳)(1981). 白日夢・イメージ・空想—幼児から大人までの心理学的意義 東京: 清水弘文堂)